

特 別 請 演 II

きよくご ま
曲独楽・宗家松井源水と歯科

——浅草寺1350年に因んで——

鶴見大学歯学部教授 松 井 隆 弘

生 いた ち

浅草に生れ、昔の12階（関東大震災で焼失）の隣、ひょうたん池（埋めて終い今は映画館）の前で育ち、浅草小学校を、そして、中学は向島の府立七中（今の墨田川高校）を卒業という状態でありながら、浅草の古い歴史を知らずに過ぎた。偶々、本年は浅草寺が1350年を迎え、その縁起を祝って、浅草寺は勿論、浅草は挙げて記念行事が企画され、実行に移されている。殊に浅草寺が浅草寺日記第1巻を発刊され、近く第2・第3・第4巻と刊行されるので、益々内容は充実してくるものと思う。一方、松井源水家は浅草とは切り離せない関係にあり、奥山（浅草公園と明治6年に指定される）の源水ごまは、長唄の越後獅子の替え唄にまで歌われ、江戸・明治時代には、松井源水の名を大いに世に弘めた。柳沢日記などにも、浅草奥山の当時の賑わいを詳細に書き、柳沢日記の随所に源水ごまを見ると書いてある。月刊雑誌「浅草寺」にも、昔からの浅草寺境内の模様など

がよく書かれている。言問の都鳥、三囲（みめぐり）神社、竹屋の渡（わた）し（渡し舟）なども、実際に知っており、今の言問橋ができて、はじめて、渡し舟も姿を消し、昔の墨堤の桜などは、今の墨田公園の桜とは雲泥の差である。清い墨田の流れで、水泳のできた時代もそれ程昔のことではない。待乳山に登って、漁に出た船の帰りを待つ子供心から？ こういう名も生れて来そうな気持も分る。大正12年9月1日の関東大震災により浅草は焼土と化した。浅草寺その他は無事で直ちに復興、それが太平洋戦争により昭和20年3月10日未明の米軍機による下町大空襲により、浅草寺の大伽藍は殆んど焼失し、昔の雄大豪華さを失って終った。現在昔の姿を止めるのは伝法院と二天門、鐘つき堂位のもので、他は再建されたものである。

浅草寺日記を中心に当時の世相

同日記の序にもある通り、この記録は当時の世相を知るためには貴重な文献である。思想・宗

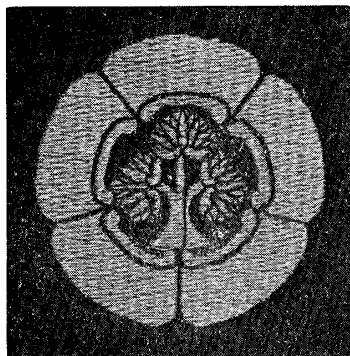


図 1 松井家の家紋（五環に立葵）

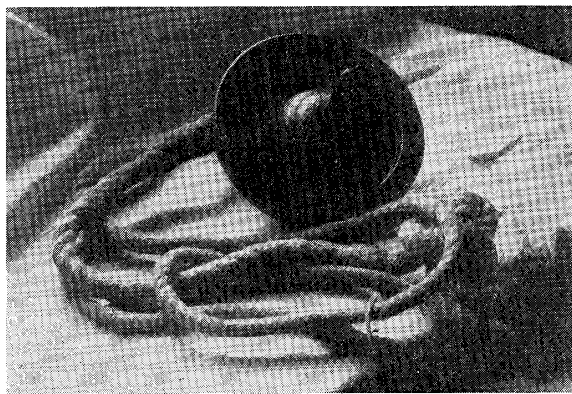


図 2 大独楽と回す紐

教・文化・芸能をはじめとして、政治・経済・社会等の諸分野に亘る貴重な事柄を残している。その巻一の延享5年2月の記録に、米沢町一丁目、若之助、久米太郎と申す者が延寿反魂丹と齒の薬を売弘めることを寺社奉行から許可されている。これは、子供物真似、手まり等いろいろ致し、売薬を営むものであると。

松井源水は、岩波書店発行の広辞苑によると、伝統の曲独楽師、先祖は越中の人、反魂丹を製造し、富山にいたが、4代目から江戸に出て、浅草奥山で家薬（家伝の薬）を売り、人寄せのため、曲独楽を演じた。徳川将軍、家重（第9代、1745—1960）の上覧を得て、遂には曲独楽を本業としたと書いてある。浅草寺日記には8代将軍吉宗が鷹狩りの際、屢々浅草奥山に回り、松井源水の独楽を見る、と書かれている。平凡社発行の国民百科事典にも、曲独楽は「こま」を使う曲芸で、平安時代から朝廷の行事の余興に使われた。江戸時代中期、美少年が博多独楽で行う曲独楽の見世物が大いにうけて、博多独楽が大流行した。とある。曲独楽の松井源水の口伝に、曲独楽の由来について、菅原の道具公が藤原時平らにより、筑紫の大宰権師（だざいのごんのそつ）に左遷され、その無聊（退屈）を慰さめるため、島守に命じて梅の古木による独楽を作らせ、これによって、菅公の回した独楽は、七日七夜回ったという。松井源水の回したる独楽は、明け六つに回すと、暮れ六つまで回る。これを称して源水一流日暮しの独楽という。

これらは何れも博多独楽が主で、大小も各種あり、回し方も色々である。

浅草寺（せんそうじ）繁昌記

浅草寺日記にもあるように、今から1350年前に、宮戸川（今の隅田川）で網にかかった観音像をまつり、多くの名僧がこれに協力して堂宇を建て、更に武将が戦捷祈願に武運長久を乞い、徳川家康が江戸に居を構えて、天正18年（1590）4月、浅草寺を祈願所に定めるなど、栄枯盛衰はあったが、代々の将軍や家臣の多くが、浅草寺に意をそそぎ、寛文12年（1672）5月、霊元天皇より

勅願所の綸旨（りんし）を賜わるなど、浅草寺に集まる江戸庶民の信仰は高まっていった。昔は今のような交通機関が発達していなかった関係もあり、専ら徒歩による距離上のことが問題であった。この点では、本所、深川、浅草などは、相呼応して催し物があれば、その流れは極めて滑に大勢の人出を見るのが例であった。浅草寺の年中行事も色々あり、「ほうずき」市などは、7月9、10日を「四万六千日」と称して、1日参詣すれば、一生かかっても日参できないような、125年余に相当する御利益があるなど、その企画もなかなか勝れたものがあつた。大きな催しとしては、御開帳が一定期間を限って許可になり（社寺奉行）これにより多数の参詣人が集まるということであつた。しかし雨など降れば人出がなく、その分を延長したいと、社寺奉行に願い出ているなども、この辺の模様が分る気がする。江戸時代も末期になり、明治・大正時代となると、浅草の繁昌も恒常的となり、大昔のような、飛び石的の御開帳に頼らずとも、浅草は人出が多くなり、浅草寺周辺の観楽街が栄え、奥山の催し物なども、面白さを増した。大正時代の映画館街、花屋敷、飲食店街、歓楽街、商店街など信仰心と合せて、遊び場所として一日を楽しむには最適の土地となっていた。

売薬のこと

松井齒科医院では、従来の慣例上、齒の薬の他に、軍中膏、がまの油という切創、ひびしもやけなどにも効くという膏薬をも売っていた。勿論、17代目は齒科医業として抜歯口腔外科を売りものにしていて、しかし、特に昔から売り物としての「百万円」齒の薬、軍中膏がまの油の人気は衰えず、かなり、買い手があつた。それは先祖代々の秘伝薬としての宣伝にもよつたことであろう。他方、抜歯術に関しても、永年の手練により、伝達麻酔などを使わず、かなりの難抜歯も簡単、短時間に処理するので、名人の評判も立つた。切創の膏薬については、刀を使う関係で、永井兵助居合抜きの名人と共に、居合抜きにより人を集めて販売したので、その方の売薬も続けられた。古い記

載では、歯の薬を売る際に、その場で直ちに抜歯をし、無痛抜去を宣伝させる方法もとられていた。

14代・16代の活躍

14代松井源水は、嘉永年間、山王祭礼に、36本の花車を曳出す前に「ケーゴ」手古舞の真先きに、將軍家は源水の曲独楽を御覧になり、それから花車を曳出す順序であった。また、独楽をもって海外に渡った最初の人である。慶応年間に出、明治初年に伊豆下田に上陸したという。香具八州取締役を仰せつけられ、名字帯刀御免となる。新門辰五郎と懇意になり、浅草奥山の地受けを頼み、羽振りのよい状況であった。15代は相続して間もなく早逝し、その弟が16代目を継いだ。16代も傑出した人材で、非常に俠客肌で、12階下に居

を構え、救いを乞う者は何人たるとを問わず面倒を見、数千人を数えたという。17代は歯科医学或は曲独楽に、殊に大正9年5月には天皇にその曲技を御覧に入れた。家紋は五環に立葵で、徳川時代に葵の紋章の使用を許されたことは、家門の誉れであった。

終りに

今回、本学会の昭和53年度、第6回学術大会が鶴見大学担当で開催されるにあたり、このような、特別講演の機会を得たことは、平素、何時の日か整理しなければならないと思っていたことの端緒を開いて下さったことは感謝に耐えない。今印刷中の浅草寺日記も全四巻が揃えば、不足分を補えると考える。第1回の発表であるため、今後の調査により拡充してゆく考えである。